

三笠宮崇仁親王殿下の 最後の御尊顔を拝して

弘田雅敷

空も三笠宮崇仁殿下の薨去を悲しむかのような曇り空の下、我々卯月会会員12名は赤坂御用地の中の三笠宮家に記帳に向かうべく御用地南門に集合しました。

門を入り都会の喧騒を忘れさせてくれる緑の木々の中を約100mほど進むと宮家の御門に到着しました。一般の方々の記事が設けられており若い人からお年寄りまで沢山の人が入れ代わり立ち代わり記帳をされていました。殿下がいかに多くの幅広い年代の国民から慕われていたのかを目の当たりにしました。我々はそれより中の宮家の玄関で記帳させて頂くことになりました。

今回の記帳には卯月会の準会員で99歳

の矢島静江様が娘さんとお孫さんと一緒に参加されたのをはじめ、48期生として士官学校を卒業した正会員の子息あるいは息女を中心にその他正会員に縁があるもの12名が集まりました。

玄関で全員の記帳が終わりかけたころ宮務官から「卯月会の皆様は奥の方で殿下の柩に拝礼していただけます」との驚きの言葉がありました。半信半疑で廊下を進みますと皇族に縁のある方々、政界、財界あるいは芸術関係者等々の献花が所狭しと置かれているのが目に留まりました。案内された部屋には柩が置かれ、その横に妃殿下が車椅子で殿下に寄り添っておられました。

最初に卯月会代表の秋山英行氏が拝礼をし、続いて99歳の準会員矢島静江様が車椅子から立ち上がりご尊顔を拝しながら涙のなか拝礼を終えられました。その後妃殿下と一言二言話をされました。続いて卯月会事務局長の衣笠陽雄氏が拝礼し、その他の会員がそれぞれ一人ずつ拝礼をさせていただきました。

私は、48期生でありノモンハンで戦死しました叔父「村瀬卓爾」の遺影を内ポケットに忍ばせ拝礼をさせていただきました。恐れ多いことを申し上げるようですが、殿下のお顔は柔和でこれから皇室のご先祖の神々が待つておられる世界へ旅立つことを楽しみにしておられるかのような印象を持ちました。

殿下は卯月会の最後の正会員であられました。卯月会のことには殿下だけでなく妃殿下も深い関心を寄せておられると衣笠事務局長から常々聞いておりました。今日の卯月会に対する特別のお計らいもそのようなお気持ちの表れと心から感謝しつつ、三笠宮邸を辞去致しました。